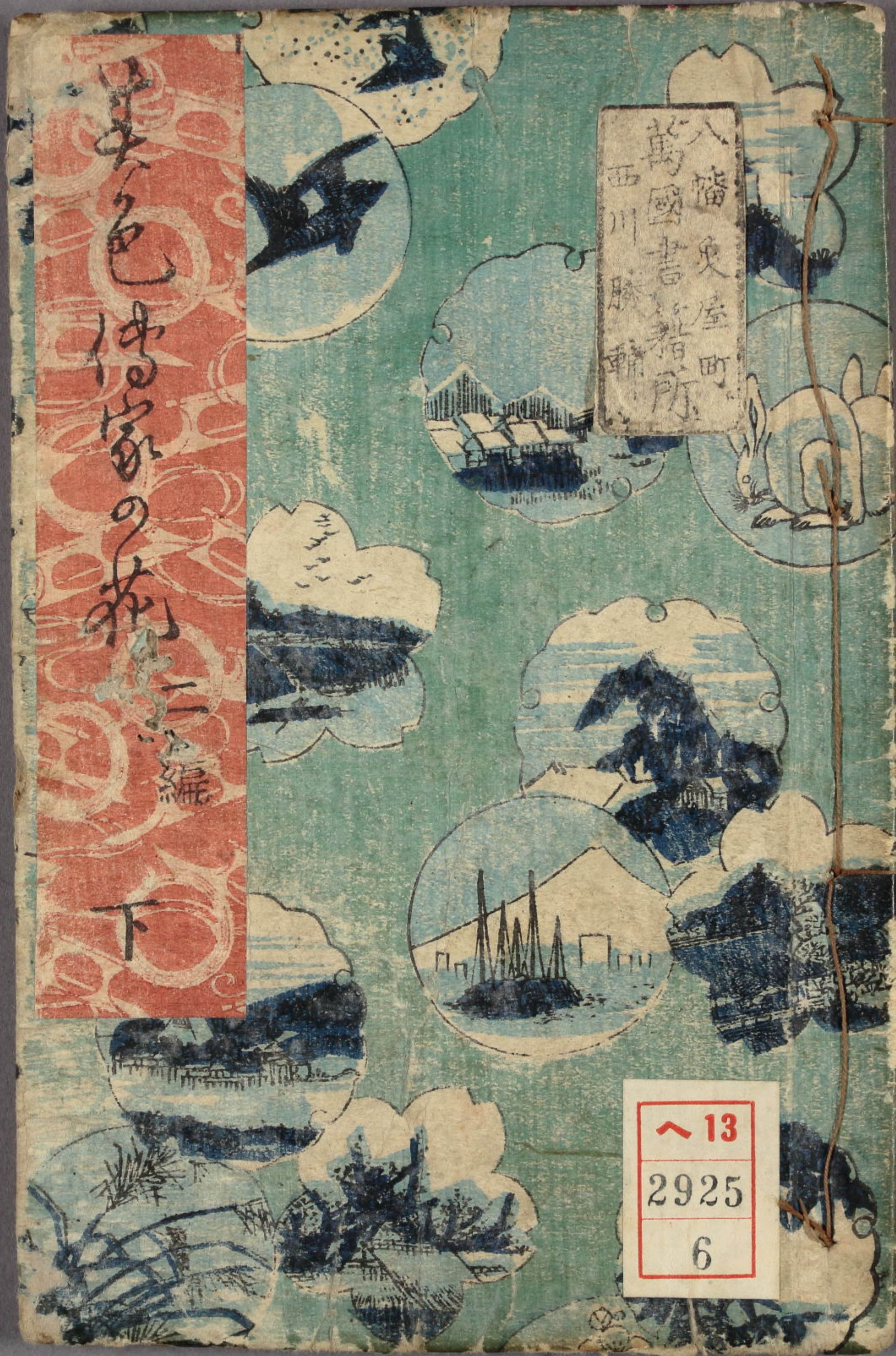
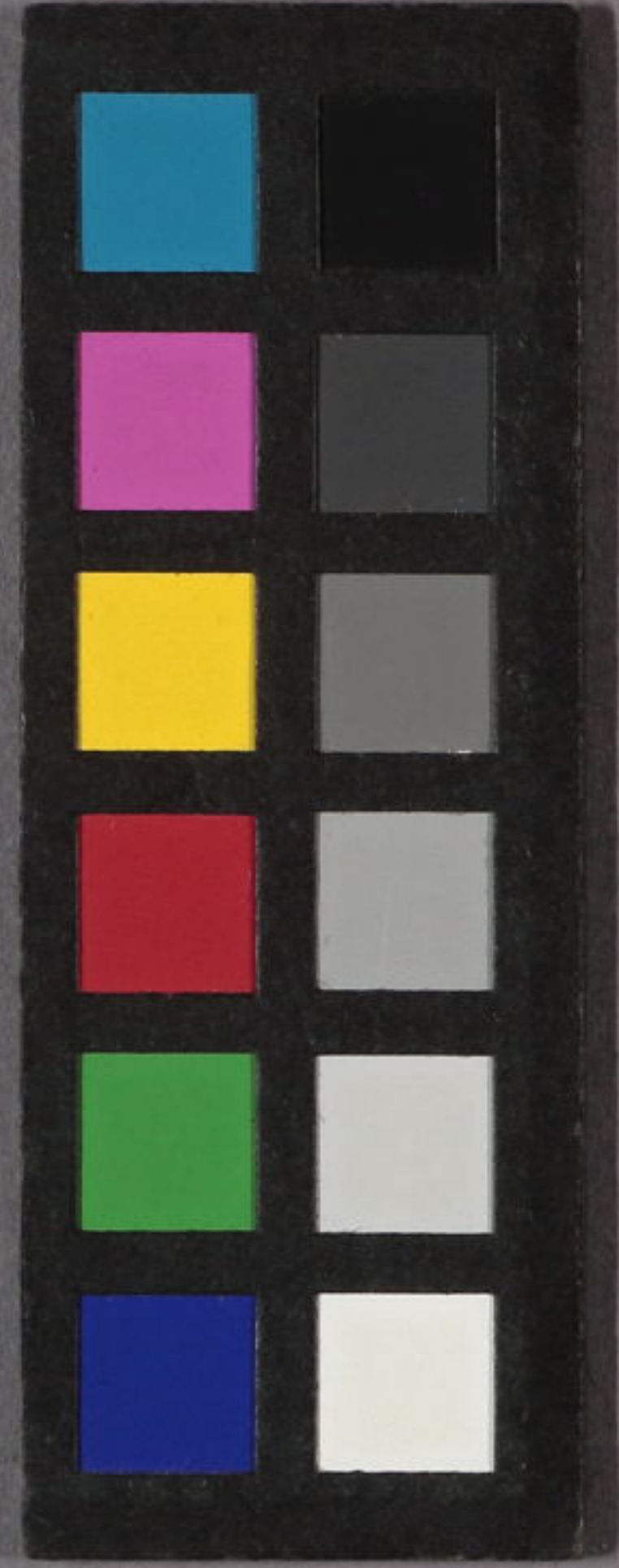




春色田家の花巻之六

江戸

鳥永春水著

第十一回

あまの川 淵の津とるせりとも思ひ深えん人の底と下
ト 詠ふ 詠ふも思ひあふる歌多るべし おふか光と糸
ささる ちきり 家の奥坐あて 誰れをきよめ 風吹く空
の山の如根ふあて 赤らむ 顔も 兵衛 浮名を田乃
川の波流とて ちきり ちきり 今月八日 詠を破る

昭和九
二月六日
終末

吹くく一棹をづも柳の南

秋光庵



田家山人

夕紅一せ城
く我漸ふうえん

今よひとを
あふる海川を
わさり
抑免つ

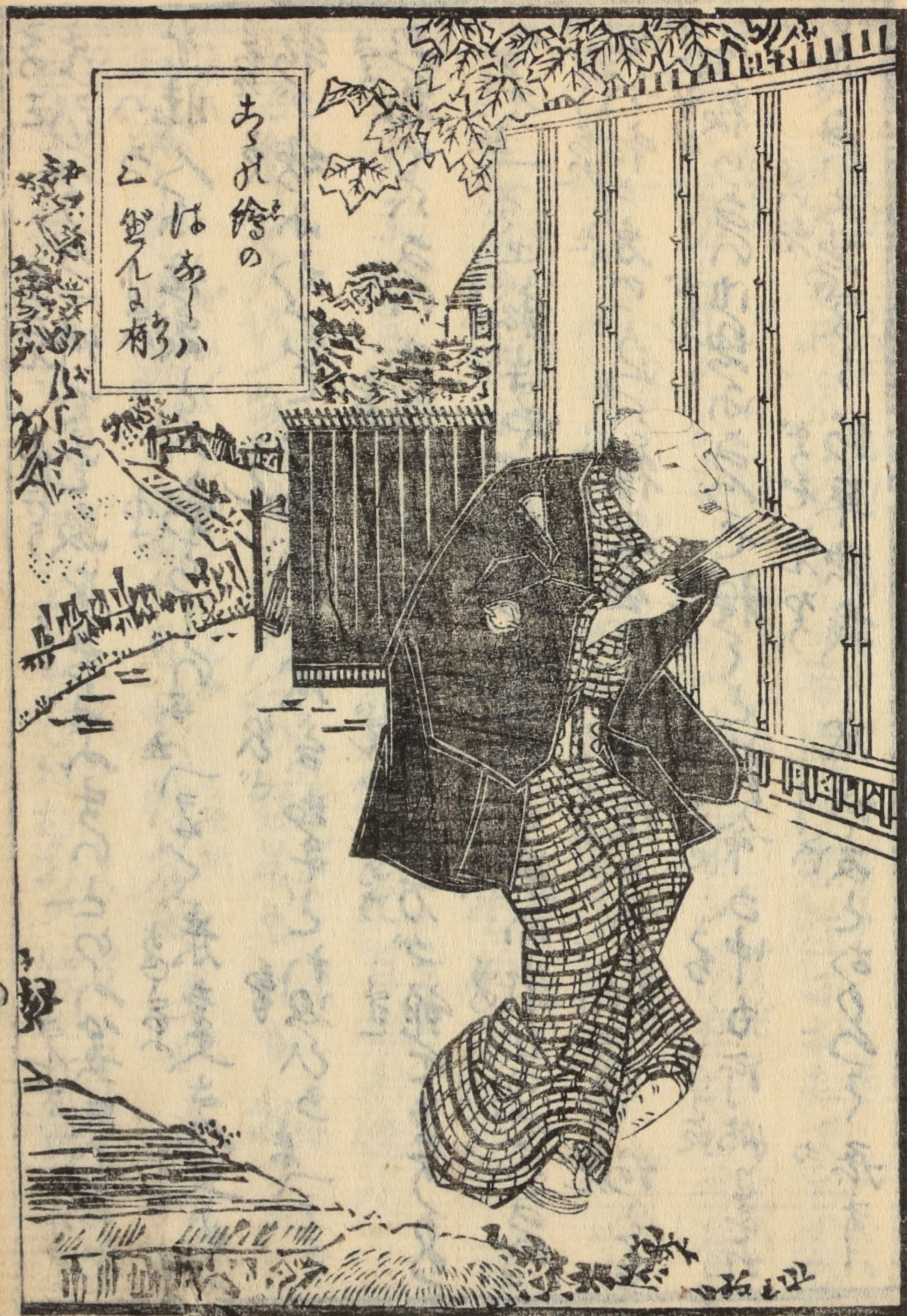
文亭主人



子お前が物をねふわりのくお長きバ及むまう
もさ地をわく他ふりうとてり毎にせむねふ
はまのう鉄わりのく安堵をなぬ先ハエ何もち最
まんを先んあひまむのかふあるまのうのと願て
案ゆいのうませんがあて望ふお前さんも中夜の
書ふすたの一件が何れもむづあうごまのまも
何れが家の宿父まんが具負うておまもでも限まり
先づとまり
西側なるふ成すもの成平をふ居るまもせん

田家六七

その妙ハ一ツト丈ハ私由先懐をて居まも子
りう
実教あうさうの何れ放とまものう子今ふもあ
を先んあひまむのかふあるまのうのと願て
案ゆいのうませんがあて望ふお前さんも中夜の
書ふすたの一件が何れもむづあうごまのまも
何れが家の宿父まんが具負うておまもでも限まり
先づとまり
西側なるふ成すもの成平をふ居るまもせん



ども何卒おひ成なりつてお呉えめさうしては是れぜいち明あて
おひとをさうぞうのまをさうま由よし私わたしの歌ふまゝのふ
ああませんう後あとでさうりまをヨヨへ何なんが何なん板いたも
不ふ解げがマ推量すいりやう紙ししてあると何なんうあふけ身みの板いたを
考えでも相あひひりてさういふれは知命ちめいのあひまもあ
さうう後あとりうて安やすお用よういふううあふまゝと云い
まゝのふの利きあひ改かへさう一ひといふ私わたしまア二途ふたぢうまゝで
さういふううああえええ人ひと情じやう人ひとふういふて
され

お呉えめさうしては是れぜいち明あて
おひとをさうぞうのまをさうま由よし私わたしの歌ふまゝのふ
ああませんう後あとでさうりまをヨヨへ何なんが何なん板いたも
不ふ解げがマ推量すいりやう紙ししてあると何なんうあふけ身みの板いたを
考えでも相あひひりてさういふれは知命ちめいのあひまもあ
さうう後あとりうて安やすお用よういふううあふまゝと云い
まゝのふの利きあひ改かへさう一ひといふ私わたしまア二途ふたぢうまゝで
さういふううああえええ人ひと情じやう人ひとふういふて
され

あるそと 富次郎が同座せー武家の老人あづふさ
座へ立出てお前の部族傳とうぢや コリヤお前さう方の
あゝ 人の茶室をてあゆみ 知るまのが只今 強てきつ
まるぞと ねぐ 強てきつ けり

春色田家の花巻之六

